

20 貞祥寺三重塔



指 定 県 宝 平成 4 年 9 月 10 日
所在 地 前 山
所有 者 貞 祥 寺



貞祥寺三重塔は、南佐久郡小海町松原湖畔の諏訪上下大明神別当神光寺に嘉永2年(1849)に再建された。慶應4年(1868)の神仏分離令による廢仏毀釈運動で神光寺が廃寺となり、明治3年(1870)4月18日に貞祥寺に売り渡され、境内に移築されたものである。

建築様式は和様を主に唐様を取り入れ、高さは16.75m。屋根の反り、三重の扇垂木、初・二・三層の尾垂木、初層の桟唐戸(縦横の枠の中に板をはめて作った戸)の唐様を除く外は、和様で調和のとれた美しい塔である。垂木数は初層34・二層30・三層26の遞減で、相輪の長さとの釣り合いもよく、全体が美しくまとまっている。組み物は和様と唐様尾垂木を用い、三手先で屋根を支え、間斗を多用しつつも束を用いない所に特徴がある。

塔の建築は、野沢村の小林源蔵昌長(1795~1858)・昭長(1825~1883)父子を中心とする宮大工で榎方・屋根師・鑄物師も郷土出身者であった。

また、傷みの著しかった相輪・三層屋根などの保存修理を平成2年(1990)9月から開始、平成3年(1991)1月工事を完了した。